

# 緒 言

昨年3月、『内海文化研究紀要』第47号の「緒言」で改元について述べたが、結局、新年号は「令和」となった。出典は、「万葉集」の梅花の歌32首の序文にある「初春<sup>れいげつ</sup>の令月<sup>きよ</sup>にして気淑<sup>やわら</sup>く風和<sup>やわら</sup>ぎ、梅は鏡前<sup>きようぜん</sup>の粉<sup>こ</sup>を披<sup>ひら</sup>き、蘭<sup>らん</sup>は珮後<sup>はいご</sup>の香<sup>かう</sup>を薫<sup>かお</sup>らす」という。奈良時代初めに大宰府の長官であった大友旅人<sup>たびと</sup>の邸宅で開かれた「梅花の宴<sup>うたげ</sup>」で詠まれた32首の歌について語った文章から選ばれた。考案したのは万葉集の大家である中西進氏とされる。

宴が催されたのは、太宰府天満宮の南西約2キロの坂本八幡宮付近とされ、新年号ゆかりの地としてこの八幡宮を訪れる観光客が急増したと聞く。もちろん、太宰府天満宮そのものを訪れる観光客も増え、昨年二度ほど太宰府天満宮を訪れる機会があったので、その賑わいを直接感じる事ができた。しかし今年に入ってから、新型コロナウイルスの感染拡大により外国人・日本人を問わず、旅行を自粛する傾向が強まり、現時点では観光業に限らず、日本経済全体の先行きが不透明な状況である。少しでも早く沈静化することを願うばかりである。

さて、内海文化研究施設が主催する季例会・公開講演会も47回を数え、3月10日には「厳島神社の舞楽と音楽」と題する講演と、楽器演奏がおこなわれた。厳島神社では舞楽と雅楽が有名だが、神社の外で楽器演奏をまじかに観ることは基本的に不可能で、それだけ価値のある催しであったと言えよう。

雅楽演奏に使用される楽器は「三管<sup>かん</sup>三絃<sup>げん</sup>三鼓<sup>こ</sup>」と言われるが、そのうち三管<sup>りゆうてき</sup>（竈笛<sup>ひちりき</sup>・箏<sup>しやう</sup>）について、それぞれの特徴や音を聴くことができた。厳島神社の神職は舞楽の舞と雅楽の楽器演奏をおこなうことが義務付けられており、常に稽古を怠らないという。竈笛から演奏が始まり、箏と笙がそれに続き、最後に笙の音色で終わる。舞よりも楽器演奏の方が大変、こうした様々なことについて知ることができた。

古くからの伝統と、新しい文化の融合、厳島ではそれが絶えず繰り返されてきた。そうした継承と変革の積み重ねについて、これからも学んでいきたい。

2020年3月

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設  
施設長 本 多 博 之



# 目 次

## 緒 言

近世広島の高雨災害と社会的応答……………中山 富 広………… 1

日南市収蔵榎原神社元宮司平部家旧蔵和古書分類目録…………妹 尾 好 信………… 21

## 地域社会の変貌と歴史の道

一賀茂台地北部を事例として……………西別府 元 日………… (1)

( ) は縦組で裏表紙から

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設研究紀要投稿・執筆要項

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設細則

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設運営委員および研究員 (令和元年度)